

方剂名	効能	生薬組成	
		主治および証	病機 方意
解表剤 辛温解表剤 6			
<p>まおうとう 麻黄湯</p>	<p>発汗解表・宣肺平喘</p>	<p>麻黄 9g・桂枝 6g・杏仁 9g・炙甘草 3g 水煎し、分3で服用する。服用後は被覆して汗をかくようにし、効果があれば中止する。</p>	
<p>傷寒論</p>	<p><主治> 風寒表証<病位は表で寒証を呈し、無汗で正気が虚していないところから、「表寒表実証」とも称される>。 悪寒、発熱、頭痛、身体痛、無汗、口渇がない、咳嗽、呼吸困難、舌苔が薄白、脈が浮緊などを呈す。</p> <p><病機> 風寒の邪を感受し、寒邪偏盛のために凝斂して表閉營鬱を呈した病態である。<傷寒論>では太陽病傷寒と称している。 寒邪が肌表を外束し、衛陽を鬱阻して汗孔を閉塞し、陽気が肌表に外達して温煦することができないため、悪寒と無汗がみられる。風寒の侵襲を受けて邪正が相争し、変生した熱が肌表に外洩すると発熱が現われるが、寒邪が偏勝であるから化熱が遅く、初期には発熱がないこともある。邪正相争によって営衛が渋滞し、経気が阻滞されるために、経脈（膀胱経）に沿って「通ぜざればすなわち痛む」の疼痛が生じ、頭痛、身体痛がみられる。肌表が閉鬱して肺気が宣発できなくなり、肺気上逆を引き起こしたときは、咳嗽、呼吸困難を伴うことがある。初期の段階で邪が化熱入裏していないので、口渇はなく、舌苔も正常の薄白を呈する。邪に抵抗するために正気が表に向かうので脈も相応に浮になり、正気が旺盛で寒邪は収引の性質をもつために緊脈が現われる。</p> <p><方意> 辛散温通の薬物で開表発汗し、邪を外に駆逐する。 辛苦、温の麻黄が主薬で、衛陽を宣通し肺気を宣発して、発汗すると共に邪を外透させる。営気が渋滞し疼痛を伴っているときには、衛気を宣発する麻黄だけでは不十分であり、透営達衛と温経散寒に働く桂枝を加え、発汗解表、散寒の効力を強めて止痛する。宣肺の杏仁は達邪を補助する。炙甘草は諸薬を調和させ、麻黄・桂枝の宣発が峻烈にすぎないように抑制し、発汗過多による正気の損耗を防止する。なお、麻黄は宣肺平喘に、杏仁は宣肺、降気、止咳平喘に働き、肺気不宣に伴う喘咳を解除する。</p> <p><参考> 温かい薬湯を服用し、蒲団をかぶったりして身体を温め、全身がしっとり汗ばむ程度になる必要がある。汗が出なければ効果が無いので更に服薬するが、汗をかき過ぎると正気が損耗して変証を招く。 麻黄・桂枝を配合すると、衛分の閉鬱を宣発すると共に営分も透発するため、気血津液不足や、裏熱を伴うときには、表寒を呈していても麻黄湯の使用を禁じている。 本方（麻黄湯）は辛温であるから、発熱、口渇、脈数などの熱証には禁忌である。</p> <p>日本での保険適応効能、効果 悪寒、発熱、頭痛、腰痛、自然に汗の出ないものの次の諸症；感冒、インフルエンザ（初期のもの）、関節リウマチ、喘息、乳児の鼻閉塞、哺乳困難</p>		
<p>まおうかじゅつとう 麻黄加朮湯</p>	<p>散寒祛湿</p>	<p>麻黄湯 + 白朮 9g 水煎し、分3で服用する。</p>	
<p>金匱要略</p>	<p>主治は、湿家の身煩疼。 風寒表証（表寒表実証）で風湿を呈し、寒湿の邪が襲表して経気を阻滞し、体やふしぶしが強く痛む、無汗、あるいは全身の浮腫（風水）がみられるものに用いる。 麻黄湯で辛散すると共に、健脾、祛湿の白朮を加えて発散を抑制すると共に祛湿を強め、「微しく汗に似る」をかかせることにより寒湿を除く。有汗のものには適さない。 全身が痛んで午後になると熱が高くなる場合には、麻杏薏甘湯を用いる。</p>		